ＩＳ～紅と蒼を纏いし男～

葛縞ナガト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～紅と蒼を纏いし男～

【Ｎコード】
Ｎ２３１２ＢＡ

【作者名】
葛縞ナガト

【あらすじ】
この小説は、１００パーセント作者の趣味ａｎｄ妄想で書かれてます。
もし、織斑一夏が存在せず、織斑千冬が一人っ子だったら？
もし、原作ヒロインズのほとんどと接点がない男がＩＳを動かしたら？
もし、その男とＩＳが規格外だったら？
などなど、いろいろと原作をぶち壊してますが、それでもいいという方は読んでください。駄文です。感想とかあったら書いてくれる

とうれしいです。

プロローグ1（前書き）

どうも、葛縞です。がんばっていきたいと思います。
ちなみに「（　　）」は心の中で語っていることです。
それではどうぞ。

プロローグ1

『インフィニットストラトス』、通称『ＩＳ』。

希代の天才『篠ノ之束』により生み出されたマルチフォーマルスーツ。本来は宇宙空間での使用を考えられていたが、その圧倒的な戦闘力により兵器へと利用されてしまったものである。

しかし、さすがにそんなものを使って戦争などできるはずもなく、さらにＩＳのコアと呼ばれるものが四六七個しかないので『アラスカ条約』など様々な条約を受けて今では競技として受け入れられている。そんなＩＳだが、重大な問題があり、それは

『女性しか動かせない』

というものだ。これによって世界は女尊男卑へとまっしぐら。男性たちは肩身の狭い思いをしている。

そんな中で、たった一人の例外が現れた。その一人は、ＩＳを動かしたのである。

桐谷和人、一五歳、私立神崎高等学校一年生。

性格、ドＳ。しかし身内にはとてつもなく寛容。

特技、古武術（無手同士、もしくは剣術に限れば歴代最強）。

趣味、鍛練（常人ではついていくことは不可能）

読書（主にライトノベル）

音楽鑑賞（人には意外と言われるがクラシック）

これが俺こと桐谷和人のプロフィールといえる。ん？あきらかにチ

ートなスペックがあるだって？そこはあれだ、俺クオリティーだ。
…っていうかあの爺どもが鬼過ぎんだよ！

なんだよ！健全なる精神は健全なる肉体に宿る、故に幼いころより鍛え上げるべし！って。
おかげで健全とは程遠いスレた精神（自分でいうのもアレだが）だよ！
顔の表情にしたっていっつも眉間にしわが寄っちまってかなりきついものになってるんだぜ？

あとだ、このプロフィールには一か所間違いがある。それは通っている高校の名前だ。
「（……いくら俺でも、これは…、きつい）」
なぜきついのか？それはクラスの生徒全員に注目されているからだ。

し・か・も、

クラスメイトは全員『女』なのだ。
きつくないはずがない（は？楽園だだと？ちょっとこっち来い。指導してやる）。

「（は～、なんでこうなった？）」

それは今からひと月ほど前にさかのぼる。

プロローグ1（後書き）

お次は回想からスタートです。

プロローグ2（前書き）

やってきましたプロローグ2。
どんどん行きましょう。

プロローグ2

ひと月ほど前、俺こと桐谷和人は高校受験に向かっていた。

「ふう。もう少しで会場だな」

俺が受ける高校はかなり名門で就職率が高い。
俺は早くひとり立ちしたかったので（ほんとは高校入学などせずにそのまま働きたかったが爺どもがそれを許さなかった）そこにしたのだ。

「まだ時間もあるし、コンビニでなんか買うか」

俺は近くにあったコンビニに入った。そしてその選択を俺はのちに後悔することになるのだが、
その時の俺はそんなことわかるはずもなく、買い物にいそしんだのであった。

「ありがとうございましたー」

コンビニ店員さんのあいさつを聞きながら外に出た俺。時間的にはちょっと急ぐべきだった。

「やべえやべえ。思ったより混んでたしな。…ん？なんかトラックが来るな？」

なんかとてつもない勢いでトラックが交差点を曲がってきた。
しかもそれを追うように…。

「なんでＩＳに追われてんだ？」

そう、ＩＳがやってきたのだ。そのＩＳは量産型の『ラファール・リヴァイヴ』だった。
トラックはなんとかそのラファールの攻撃をよけていたが、ついにかすめた。

それによってトラックは横転。そのトラックに積み込まれていたらしいコンテナが俺のほうに勢いよく…って！このままじゃ直撃するし！

「どわぁっと。いったいなん…」

「ははははぁっ！ようやっと捕まえたぜ！」

なんかラファールを装着してるやつが言った（ついでに言うと俺は何とかコンテナを回避、ケガなくたっている）。どうやら狙いはこのコンテナらしかった。

コンテナは先ほどの衝撃で人一人が入り込めるくらいの歪みができていた。しかも…。

「（あれ？なんでこんな都合よく俺のほうに歪みが向いてるわけ？）」

そう、なんでかコンテナの歪みは俺に向かって開いているのだ。
……毒食らわば皿まで。こんな状況だ。入ってみるのもいいだろう。
っていうわけであっちでトラックの運転手と謎の襲撃者が言い合ってるけど気にせずに俺はコンテナに入った。

研究者ＳＩＤＥ

私はとある企業の研究者だ。私はようやく出来上がった試作機のＩＳを本社に運ぶ仕事をしていた。だがどういうわけか極秘のはずの情報が漏れていた。よって私は襲撃を受けたわけだが。

「くっ、貴様は何者だ！」

「はっ、そんなことに答えるわけがねえだろうが！」

ちっ、何か情報を引き出せればよかったのだが。

だが狙いは間違いなくＩＳだろう。アレを渡すわけにはいかない。

「貴様がどこのものかは知らないが、あれだけは渡すわけにはいかん！」

「渡さなくても結構だぜ。なんせ…奪ってくからなぁ！」

私が拳銃を構えても微動だにしない。

当然だ。ＩＳにはシールドエネルギーが存在する。拳銃程度では脅しにすらならない。

「（くっ、どうすればいい？）」

万事休す、と思っていたその時、突然コンテナの天井が爆ぜた。

「「なっ！」」

これには私も襲撃者も驚いた。
そして気づいた時には襲撃者は吹き飛んでいた。
そのかわり、私の前にいたのは、

紅と蒼の二色に彩られた、

全身装甲のＩＳだった。

プロローグ2（後書き）

はい、回想終了です。
サクサク行きたいところですが、あまりサクサク行くとストックが切れてしまうのでほどほどにしたいと思います。

自己紹介。え？なにこのテンション？（前書き）

第3話目です。
けっこう原作参照とか出てきますが許してほしいです。
あとお気に入りに登録してくれた人たち、ありがとうございます。
これからもがんばりますのでどうぞご覧下さい。
では、本文スタートです。

自己紹介。え？なにこのテンション？

桐谷和人ＳＩＤＥ

そんなこんなでＩＳ動かしちまって、
さらに襲撃者さえも退かせてしまったもんだから（まあ性能差がありすぎたが）さあ大変。

いろんな企業が言い寄ってきたり、
マスコミには群がられるわ、
そのＩＳを作っていた企業からテストパイロットにならないかと言われたり。

いろいろとウザったいことが多かったわけですよ。
んで、とりあえずＩＳのことを学ぶという大義名分を掲げて、この『ＩＳ学園』へと入学したのだ。

つ・ま・り、

俺はこのクラスどころか、この学校全体でたった一人の男子学生なのだ。
まさに黒一点。
……つらいんだよぉぉぉぉぉぉ！！！
気軽に話しかけられる奴なんて誰もいないし！
みんなは俺のことをがん見してるし！！
俺がいったい何をしたというんだぁぁぁ！！！

「……谷君、桐谷君！」

「ふぇい！」

あ、やべ。絶望してて呼ばれてることに気付かなかった。
俺を呼んでいたのはこのクラスの副担任『山田真耶』。
試験の際にも会った。が、一つ言わせていただきたい。
……この人絶対俺より年上じゃないですよね？
だって俺より背は低いし、雰囲気は完全に小動物だし。
しかも今まさになんか泣きそうな顔してるんですけど。

「あ、そ、その、ごめんね？今自己紹介で、次は『き』だから桐谷君なんです。
だからその、怒らないでくださいね？」

「いや、怒らないんで。今のは単純に考え事してて話聞いてなかっただけですから。
ついでに怒ってるように見えるかもしれませんが、これが俺の素の表情なんで」

「そ、そうなんですか。よかったです。それじゃお願いしますね？」

「へーい」

返事をして俺は立ち上がる。そしてクラスメイト全員を眺める。
全員なんらかの顔をしてこちらを見ている。
中にはなんか敵意というか憎悪みたいな視線を感じるがまあいい。

「桐谷和人だ。趣味は鍛練、特技は…まあ秘密だ。これからよろしく頼む。
あと俺の表情については今山田先生に言った通りこれが素だ。気

にしないでくれると助かる」

しーーんとなる。あれ？なんかしくじった？

「「「「き…」」」」

「き？」

「「「「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」」」

「（ぐあああああああああああああああああ！！）」（鼓膜に甚大な被害が！）

俺が軽く悶えていると…。

「なんかワイルド系！」

「それにかなりのイケメン！」

「あの目で睨まれたい、罵られたい！」

「桐谷くん、はぁはぁ」

おいおい、このクラスはどうなってるんだ（ついでに後半の何人かはもう手遅れっぽい）。

俺が戦慄しかけていると。

ずぱこーん！

「いって…って誰だ！」

どぱこーん！（威力はさっきよりも上）

「っっっっ～～～～」（縮こまって悶えてる）

「さっさと座らんか馬鹿者。そして先生には敬語を使え」

「あっ、織斑先生」

なんか俺にはＢＧＭとして銅鑼の音が聞こえるんだがおかしいのだろうか？

このキリッとした感じの女性は織斑千冬。

知らない人はいないんじゃないだろうかと言える超有名人。

なんせＩＳを使った世界大会で優勝しているのだ。

その功績により、『ブリュンヒルデ』とも呼ばれる（本人はどうもそれを嫌がっている節があるが）。ていうか、なんでこんな有名人がいるんだ？

「さて、諸君。わたしがこの一年間このクラスの担任を受け持つ織斑千冬だ。わたしの仕事はまだ何も　知らない一五歳の小娘たちを……（めんどいんで省略。詳しく知りたい人は原作参照）」

へえ、この人めっきり表舞台に出なくなったと思ったら教師をしてたのか。

意外だ。

この人だったらまだ現役でパイロットできるだろうに。

そしてなんつー軍隊まがいな自己紹介。

ここは軍ではありませんよ、織斑教官。

……軍と言えば、あいつどうなってるかな。最近文通だけだし。
二年前と比べてどれくらい変わったんだろうか…？
ていうかあいつの手紙から察するに副隊長のやつのせいでいろいろと
間違った方向に日本を理解しつつあるんだよなぁ。

「で？なぜこのような騒ぎになった、桐谷」

「普通に自己紹介しただけです」

「ふむ…、まあいい。座れ」

言われたので座る俺。そうして続けられる自己紹介。
その間なぜか織斑先生に見られている俺。
俺、何かした？

……俺、この人苦手かも。

自己紹介。え？なにこのテンション？（後書き）

はい、ここで切ります。
人物設定やＩＳ設定についてはもうちょっとしてからになると思います。
予定としてはクラス代表決定戦が終わってからでしょうか？
まあ駄文だとは思いますがどうぞご贔屓に。
ではでは。

侍ガールとの出会いと授業と（前書き）

はい、４話目です。
ここで和人君とＩＳの規格外さがほんの少し露呈します。
ではどうぞ。

侍ガールとの出会いと授業と

ＳＨＲが終わって一限目が始まる前の休み時間。
……一つ訂正。俺にとっては休み時間ではない。
むしろＳＨＲよりひどい。
なんせ他のクラスからも俺を見に来ているから。
しかも全員なんか牽制し合って話しかけてこようとしないんだよね。
うん、これ、なんてイジメ？

「（話しかけるんだったら話しかけてきてくれ～）」

そんなことを考えていたらなんか急に騒がしくなった。
ん？なんか一人がこっちに来るんだけど。

「……ちょっといいか？」

その子の第一印象は武士。長い髪をポニーテールにして目はきりっと吊り上り、
その姿勢は全くぶれない。うん、なかなかな使い手だ。

「ああ、いいけど。えっと…」

「篠ノ之箒だ。箒でいい」

「あ、そう。んじゃ箒、俺も和人でいい。んで、ここで話すか？」

「ああ、ここでいいだろう」

箒は腕を組んで俺を見て、いや、観ている。
おそらく、趣味が鍛練と聞いてどれほどのものなのか興味がわいたのだろう。

「それでだ、和人。おまえは趣味が鍛練だといったな？剣は使えるのか？」

「もちろん。むしろ剣術と無手同士だったら流派の歴史の中で開祖を超えて最強って言われてる」

「ほう、それで流派名はなんというのだ？私は篠ノ之流だが」

「俺のほうは『残月流』だ。実践本意の殺人武術さ。
しかも新しく生み出される武器に合わせて進化させるように開祖の『残月則宗』が
伝えてたらしくてな。今じゃ拳銃を使った銃衝術まで確立されてるぜ」

「残月流か。聞いたことはあるが、まさか今でも伝えられているとは」

「ま、それがまっとうな判断さ。今時殺しの業を伝えるのが異端ってもんだ」

俺は肩をすくめてみせる。箒のほうは違いないというような顔をして苦笑している。

「箒、そろそろ授業開始だ。さっさと座らねえと出席簿が火を噴くぜ？」

「確かにあれは痛そうだな。さっさと座るとしよう」
再び苦笑しつつ箒は自分の席に戻っていった。さて、俺も準備しなければ。
アレ、ほんとに痛いんだよなぁ。
なんだよ、紙でできてるはずなのに、なんで竹刀より痛いんだよ。

「え～～っとですね。ですからＩＳとは……（省略）」
うん、一限目ですが。……結構きつい。
予習はしっかりしてきたけど、それでもやっぱり付け焼刃感がいなめない。
これはもう少し本腰を入れて勉強せなあかんな。

「桐谷君、今までのところでわからないことはありますか？」
「いえ、今のところは何とか。
わかんないところがあれば放課後にでも聞きに行くんで構わずに進行してください」
「はい、わかりました。それじゃわかんないことがあったら遠慮なく来てくださいね？」
そういって山田先生は授業を再び進める。うん、俺ももっと頑張んないとな。
『（そうよ、和人。あなたはあたしのマスターなんだからちゃんと頑張ってもらわないと）』

『（……レスティア、授業中に話しかけんな。集中してなきゃついてくのもしんどいんだから）』

『（ぶーぶー）』

『（はいはい）』

ん？いったい誰と話してんだって？
それは俺のＩＳのコア人格、レスティアだ。
なんか俺がＩＳに乗り込んだ瞬間、覚醒したらしくて以来、
ひまさえあれば俺に話しかけてくる甘えん坊だ。

正直こいつが覚醒してなければ俺は謎の襲撃者に叩きのめされて
下手すりゃ死んでたかもしれないんで、こいつには超感謝。
こいつが覚醒してくれたからこそ、あそこまでＩＳが強化されたっていうのがあるし、
初期化と最適化も一瞬で済んだんだよね～。

『（じゃあさ、授業が終わったら話しかけてもいい？）』

『（ああ。それならいいさ。ただし、他の人が話しかけてきてるときはやめてくれよ？）』

わかってるよーと言いながらレスティアはコア空間に戻っていった。

侍ガールとの出会いと授業と（後書き）

はい、第４話でした。
『（　　）』はＩＳのプライベートチャンネルなどと思っててください。
次は少し人物設定を入れようと思ってます。
では。

人物設定（前書き）

規格外な主人公のスペックを多少公開します。

人物設定

桐谷和人

顔つきは多少きついもののほんとは心優しい男。
ただし、心優しい分とでもいうのか、敵に対しては容赦しない。

古流武術、『残月流』の使い手。
技量に関しては剣と無手は歴代最強。開祖の『残月則宗』すら超えるのではと師匠で
ある人々から評価されている。
しかし、その修業は苛烈を極め、たとえば木刀で布を切らされたり、
気配察知を高めるために山に放り出されたり、
挙句の果てには全方位から弓矢を射られたりなど。
本人は爺共マジで鬼畜と言っている。
しかしそんな修行も彼は今ではいい思い出と思っている。

ＩＳ戦闘に関しては素人だが、対人戦に関してはエキスパートであるため、
初めてＩＳを動かしたときでさえすさまじい戦闘力を見せつけた。
専用ＩＳは『暁と黄昏≪サンライズ・トワイライト≫』

レスティア

『暁と黄昏≪サンライズ・トワイライト≫』のコア人格であり、
和人の相棒。和人がコンテナに安置されていたＩＳに触れた瞬間に
目覚めた。

性格（？）は天真爛漫、退屈を嫌がり、和人に対して甘えまくる。

戦闘では和人をサポートするＡＩの役割を果たす。

人物設定（後書き）

ＩＳの細かい設定に関してはもう少し後に。
では。

は？代表候補生？なにそれ、強えの？（前書き）

第６話です。
まあタイトルで分かるかもしれませんがあの人登場です。
戦闘はまだです。おそらくこれから２，３話先になると思います。
では、どうぞ。

は？代表候補生？なにそれ、強えの？

一限目終了。先生方が去っていくと教室内は一気に騒がしくなる。
友達と話す奴、授業の復習をする真面目な奴。
そして引き続き俺を観察してくる奴。
……ちなみに俺は復習する側だ。
そうしなきゃついていくのがつらい。

レスティアも俺の大変さを理解しているのか話しかけてこない。
うん、やっぱり最高の相棒だ。
しかし、そううまくはいかないのが世の常で。

「ちょっとよろしくて？」

「（うへーい、いつか来ると思ってたが意外と早かったな？）」

俺に声をかけてきたのは明らかに俺を見下した女。
完全に女尊男卑に染まりきった外人だった。
長めの金髪で、それをロール状にしている。
この髪形はおそらくイギリス人だろう。

「よろしくない。いま復習で忙しい。あとにして」

「まあ、なんてつれない態度でしょう！このイギリス代表候補生であるわたくし、
セシリア・オルコットが話しかけているというのに！」

……俺さぁ、こういうやつを見るとさ、こう、首の骨をさ、
こきっとやりたくなるんだよねぇ。
やってもいいよな？　え？　だめ？

「いや、代表候補生って言ってもさ、それがどんだけすごいのか
　ついひと月ほど前までただの一般人だった俺には分からないんだが？」

ちなみにこれはまるっきり嘘。
さっさと立ち去ってほしいから言ったことである。

「ふん、やはり男とはしょせんその程度ですか」

期待して損しましたわとか言ってるが、
そっちが勝手に期待しただけだろうが。
そして勝手に損してそれを俺のせいにするな。

「まあいいですわ。わたくしはとても優しいので、
　ＩＳについてわたくしが教えて差し上げないこともなくってよ？」

これがやさしいってか？だとしたら世界中の人々は優しいやつばかりだな。

「いらねえよ。最初っから人を見下す奴に教えを乞うほど俺は落ちぶれちゃいない」

「…生意気ですわね、男のくせに」

はいはい。

「んじゃ、もう話はおわりか？俺としてはそろそろ次の予習を始めたいんだが？」

「ふん、また来ますわ。覚えていることね」

覚えちゃいないがな。だが、この会話がフラグになるとは…。

さすがに思わなかった俺だった。

二限目。今回は織斑先生の授業だ。

さあ集中してなきゃ鉄拳制裁だからさっきよりも集中してなくては。

「ああ、そういえば、クラス代表を決めなくてはいけないな」

クラス代表。なんでも近々クラス対抗戦があるらしく、

それに出るやつを決めなくてはいけないらしい。

まあ簡単に言えば委員長だな。まあめんどくさいから立候補する気はないけど。

でも、さっき織斑先生が他薦、自薦問わないって言ったからなぁ。

やな予感するなぁ。

「はいっ、桐谷くんを推薦します！」

やっぱりきたーーーーーーーーーーーー！

「私も桐谷くんを推薦します」

「わたしも！」

「ウチも！」

うわぁ、担ぎ上げる気満々だぁ。
誰か立候補してくれないかなぁって思ってたら。

「待ってください！納得できませんわ！」

来ましたよ。ていうか忘れてたわ、オルコットの存在。
そこから先は男に対する批判と日本に対する暴言の嵐。
……こいつ代表候補生って意味を理解してないのか？

『（言い返さないの？）』

『（ん、どうしようかなぁ。
言い返したらめんどいことになりそうだしね。って、ん？）』

「……。なんせわたくしは唯一教官を倒したのですから！」

「それなら俺も倒したけどなw」

「なっ！」

むしろあれは倒せないほうがおかしい気がする。

だってただ突っ込んできてそれを避けると同時に少し後ろから押したら
壁に激突してそのままリタイアって（笑）。
……って、あ。

「……わたくしだけとききましたが？」

はいフィッシュ！もうどうにでもなりやがれ（自棄になった）！

「あれだ、女子ではっていうオチだ（爆笑）」

「あなたも教官を倒したっていうんですの？」

「さっきからそういってるんだが？
まあお前にも負ける気はしないけどな。
お前からは全く脅威を感じないし。
お前よりもむしろ篠ノ之のほうが脅威を感じるし。
あいつが専用機を持ってなおかつ
おまえと同じ時間訓練すればきっといい操縦者になるぜ」

突然話題にあげられた箒はなんか顔を赤くしてこっちをおろおろとみてるんだが。
……かわええ。

「っ～～、決闘ですわ！」

「まあいいぜ。その歪んだ誇りをぶっ壊してやるよ、セシリア・オルコット」

「話は決まったな。では一週間後の放課後、第三アリーナで行う。
それまで各自、準備をするように。では授業を再開する」

この話はこれで終わりといわんばかりに織斑先生が授業を再開した。
ふっふっふ、オルコットよ。俺をその気にさせたことを後悔するが

いい。

『（本気でやるの？）』

『（ああ、本気で遊んでやる。
そうした状態で叩きのめせばあいつのプライドはボロボロだろう？）』

『（……やっぱり和人ってドＳだよね）』

失礼な。俺は敵に対しては容赦しないだけだ。

は？代表候補生？なにそれ、強えの？（後書き）

作者：これからは普通のあとがきじゃつまらんと思うのでちょっと変えてみます。　　ではでは主人公君に登場してもらいましょう。

桐谷くーん。

桐谷：はいはい。いったい何の用だよ。俺は勉強せないかんのだが。

作者：お前な。少しはまじめに取り組んでくれ。でないとお前の周りで修羅場が発　　生するぞ？

桐谷：ほ～～う？（真剣を素振りしてる）

作者：……すみませんしたー！！（土下座）

桐谷：わかればいい。んで？俺は次回の予告でもすればいいのか？

作者：その通りデス。こう面白くお願いします。

桐谷：はいよ。

初日から波乱に巻き込まれた俺。

しかし波乱はこんなもんじゃ済まない。

それは放課後明らかに！

次回、『ルームメイト？へ？俺1人じゃねえの？』だ。

よろしく頼むぜ！！

ルームメイト？へ？俺1人じゃねえの？（前書き）

第7話です。
桐谷くんは原作一夏くんのようなことはおこしません。
期待してた人は申し訳ないです。

ルームメイト？へ？俺1人じゃねえの？

そんでいろいろあって放課後。
俺は教室で復習をしていた。その時、
「あ、まだいましたね。よかったです」
「へ？山田先生？どうかしましたか？」
入ってきたのは山田先生。どうしたべ？
「あのですね。寮の部屋が決まりました」
「あれ？俺の入学って予定外だったからしばらく
調整に時間がかかると聞いていたんですけど？」
「それがですね、何とか調整したんです。その辺政府から聞いてません？」
政府のあたりから先生は声を潜め俺にしか聞こえないようにした。
なるほど、俺というケースが万が一さらわれたりしないようにか。
「わかりました。ただ荷物に関してはどうするんです？」
「ああ、それなら…」
「私がおまえの実家のほうに掛け合っておいた。もう届いているだろう」

織斑先生の登場。まあ荷物はほとんどまとめてたから問題ないか。

「了解しました。んじゃこのまま寮に向かえばいいんですね？」

「はい。あ、これがカギです。
シャワーは部屋についてますのでそれを使ってください。
一応大浴場はあるんですが桐谷君は使えません」

「当然でしょうね」

女子と一緒に風呂とか。無理無理。俺の理性とかが無理。
…そういえば聞いてないことが一つ。

「……ちなみに一人部屋ですよね？」

「そう都合よくなるわけがないだろう。相部屋だ」

まじかぁぁぁぁぁ！

「ついでに質問です。その相部屋になった奴って誰です？」

「篠ノ之だ。まだいいだろう？」

あー、箒か。……あいつなら俺を襲ってくることもないだろうな。
うん、平気平気。

「まあそうですね。それじゃ今から向かいます。織斑先生、山田先生、また明日に」

「ああ」

「はい、桐谷君もまた明日」

二人の先生に挨拶して俺は寮に向かった。

「ここか」

俺は自分の部屋になる一〇二五号室の前にいた。

……万が一箒が着替えたりしてたらやばいので気持ち強めにノックする。

……反応なし。

「ま、はいってみるか」

俺はノブを回して部屋に入った。

「おー、すげー。高級ホテルも真っ青じゃん」

少なくとも今までで一番いい部屋だ。

ついでにシャワー室らしき部屋から人の気配。

…こいつはまずい。ラッキースケベの称号を得てしまうかもしれん。

俺は急いで部屋の外に出た。

「ん？誰かいたのか？」

「おい、箒。俺だ。和人だ。とりあえずなんか着ろ。服着たら呼んでくれ」

「か、和人！／／／／なんでこの部屋に？」
「あー、説明するから早く部屋に入れてくれ」
「あ、ああ／／／／」
それからほんの少しして。
「い、いいぞ」
「おう。すまん」
俺は部屋に入ったのだった。箒はなぜか胴着を着ていた。
…あ、すぐに着れるのがそれだったのね。
「で、せ、説明してほしいのだが」
「おう。実はな……」
俺は先ほど聞いた話を箒にそのまま話した。
最初こそ箒はいろいろ言ってきたが上からの決定ということで納得したらしかった。
「なんというか、おまえも大変だな和人」
「ああ。まあお前でよかったよ」
「なっ／／／／なぜだ？」

「いや、他の女子だったら（性的な意味で）襲われそうだったし」

「ああ、なるほど」

箒はおそらくＳＨＲのことを思い出したんだろう、うんうんとうなずいている。

「わかってくれて何よりだ。
んじゃ、そんな長い時間じゃないだろうが、よろしく頼む」

「う、うむ」

それから二人でいろいろとルールを決めたりしてから寝た。

ルームメイト？へ？俺1人じゃねえの？（後書き）

作者：はい、やってまいりました後書きタイム。
今回はレスティアさんに登場願います。

レスティア：はーい♪みんなよろしく～♪

作者：……元気だねぇ。作者なんて寒さで
ガクガクブルブルしてるってのに。

レスティア：だってあたしは寒さなんて感じないもーん。

作者：……そうだったな。
んじゃ、今回の話について少し感想などひとつ。

レスティア：ん～、今回の展開はある程度分かった人も多いと思いまーす。
もっと面白味があってもよかったんじゃない？

作者：ぐっ、だがしかし。作者にはこれが一番いいと思ったんだ。
ラッキースケベもいいけど、
桐谷くんはそんなキャラじゃないだろ？

レスティア：確かに。

作者：つーわけで次回予告頼むわ。

レスティア：りょーかい♪

明かされるプライベート
盛り上がるクラス
しかしそんなの望まない当人
和人がとる選択は？
次回、『決闘前の小休止』です。
見てくれるとうれしいな♪

決闘前の小休止（前書き）

第８話。
……まだ投稿してから１週間たってないはずなのに
早くも総合ＰＶ１０，０００突破しました！！！！！
うれしいでっす！！！！！
あと感想も増えてました。ありがとうございます！
ちなみに感想にはしっかり返信をしようと思ってますので、
感想なりなんなりある人は書いてくれるとうれしいです。
今後の展開の参考にするかもしれないので。
では、『決闘前の小休止』どうぞ。

決闘前の小休止

ＩＳ学園二日目。

俺はいつものように朝早く起きてランニング二〇キロしたあと、
真剣で素振りを五千回。
その後腕立て、スクワットをそれぞれ二〇〇回三セットして
部屋に戻った（こらそこ、人外だなんて言わないの）。

そしてシャワーを浴びて、着替えたところで箒が起きたので箒とともに朝食。
ちなみにこの時に織斑先生が一年寮の寮長だと知った。

そして授業中にちょっとしたことが起きたのだ。

「あの、先生。篠ノ之さんってもしかして篠ノ之束博士の関係者なんですか？」

ＩＳのコアについての話をきいて一人の生徒が質問したのだ。

「ああ、篠ノ之は束の妹だ」

……織斑先生、プライバシーってわかります？
案の定、クラスメイト達は箒に質問を投げかける。
あ、そろそろあいつ限界だ。

「あの人は「おい、ガールズ」…和人？」

「お前らさ、身内が天才だからってそいつが全てを知ってるわけないだろうが。
それに天才の身内っていう目で見るのは個人に対する冒涜だぞ」
ちょっときつめに言ってやるとみんな俺の言わんとすることが分かったらしく
箒に少し誤って席に戻っていった。
その様子を織斑先生は感心したように見てて
箒はなんか顔を赤くしてこっちを見てるんだが。はて？
『（……鈍感だね…）』
『（あ？）』
『（なんでもないよ）』
？？どうしたんだ、レスティアのやつ。
まあそんなこんなで授業が終わり昼休み。
俺は箒のほうへ歩いた。
「よう、箒。飯食いにいかね？」
「わ、私とか？」
「おう、おまえとはいろいろと話が合いそうだしな。
ついでに交流を広めるためにほかのやつも誘うか？」
「あ、ああ。構わん」

「そっか。おーい、一緒に飯食わねー？」

「うん、行く行くー」

「わーい、たにちーとご飯―」

「わたしお弁当だけどいいよね？」

うんうん、いい傾向だ。
っていうかたにちーって。……まあいいか。
そして俺たちは食堂に向かう。
これは余談だが、歩く俺たちの後ろをハーメルンの笛吹きのごとく女子がついてくるんだが。なんか怖い。

そんでもってつきました食堂。
ＩＳ学園の食堂は様々な国籍の人々がいるためかメニューが豊富だ。
まあ俺が選ぶのは基本和食か中華だが（腹にたまるので）。

「さて、いただきます」

「なあ和人、ほんとにそんなに食べるのか？」

箸がなんかありえないものを見るように俺の前を見る。そこには、

麻婆丼（超大盛り）
生姜焼き（肉、キャベツ共に大盛り）
味噌汁（どんぶり一杯）
ざるそば（二人前くらい）
緑茶（二リットルペットボトル）

が並んでいる。
……ほんとはまだ食えるけど自重してみました。
『（いや、これは自重してるとは言えないよ）』
レスティアよ。それは言わないのがお約束だ。
「いや、これでも自重してるんだぜ？俺って燃費が異常に悪いからな。
こんくらい食わないともたないんだ」
「そ、そうか……」
「つうか、箒はいいとして、他のメンツ。そんだけで大丈夫なのか？」
箒は普通に定食を食べているが他の三人は一品くらい。
「わ、私たちは平気だよ。お菓子とか食べてるし…」
それ、一番太るパターンだけど俺はデリカシーがあるから何も言わない。
「ふーん、ま、いいか。人それぞれだ」
「ねえ、あなたが噂の一年生？」
「んあ？噂？もしかして決闘のことってもうそんなに広がってんですか？」

話しかけてきたのは二年生らしき先輩。

「ええ。それにしても代表候補生にケンカ売るなんて。大丈夫なの？」

「ケンカを売ったんじゃなくて買ったんですけどね。あと大丈夫っすよ」

「ほんとにー？なんだったら私がＩＳ操縦についてコーチしてあげるけど」

……この人も少しなめてるな。まあいい。

「気持ちはうれしいんですけどねぇ、必要ないですよ。あんな天狗は今の俺で十分だ」

「ふーん、それじゃあ間違いなく勝てるってこと？」

「もち。なんだったら楽しみにしててくださいよ。あの人を見下して正当な評価をできない愚か者が叩きのめされるのをね」

その時の俺は箒たちやレスティア曰く獲物を見つけて嗤った死神のように見えたそうな。先輩も軽く引いてるし。

「じ、じゃあ楽しみにしとくわね」

「あいあいー」

俺は手をひらひらと振って食事に戻る。

「……あまり何度も言いたくはないのだがほんとに大丈夫か？」

「箒までかよ。大丈夫大丈夫。なんなら放課後ちょっと剣で勝負でもするか？」

「い、いいのか？たしかにおまえの実力を知っておきたいとは思っていたのだが」

「俺も退屈だしな。どうせ部屋に戻ったって
復習予習しかしないんだ。多少なら問題ない」

「うむ。それでは放課後私とともに来い。剣道場に連れて行ってやる」

こうして今日の俺の放課後は予定が決まったわけであった。

決闘前の小休止（後書き）

作者：どうも、葛縞です。今回登場願うのは篠ノ之箒…と見せかけて
まさかの織斑千冬先生にしてみましょう。せんせー、お願い
します。

千冬：ふむ、よろしく頼むぞ。

作者：……相変わらずお堅いですね。ここはあえて作者権限で
思いっきりはっちゃけた千冬さんを…

がすん！！！

作者：……（頭から煙出して気絶中）

千冬：するな、馬鹿者。それと織斑先生だ。
作者だろうと容赦はしないぞ？（出席簿から煙出てる）

作者：……（引き続き気絶中）

千冬：…む？気絶してるか。
いかんな、桐谷の基準でたたいてしまったようだ。

桐谷：（勝手に登場）織斑先生、とりあえず次回予告でも
してみればいいんじゃないですか？

千冬：確かにそうだな。では。
放課後の剣道場
そこで相対するは侍少女と人の姿をした刃

閃く竹刀はすべてを打ち砕く
次回、『俺の実力？知らないほうがいいぜ？』だ。
諸君、見なければグラウンド５０週だ！

俺の実力？知らないほうがいいぜ？（前書き）

第９話です。

……いやはや、自分でもどうかと思うくらい桐谷くんを強化しすぎましたね。これから先負けることってあるのでしょうか…。仮に負けさせるにしてもどうやって負けさせよう……。

俺の実力？知らないほうがいいぜ？

放課後。俺は防具をつけて箒と向き合っていた。
箒は正当な剣道の構え。
俺は異端な無形の位。っていうか防具邪魔。

「部長さん。先に謝っときますね。竹刀とか壊すかもしれないんで」

「いやいや、いいよ。謎の一年生の実力を測れるんだ、安いものだよ」

なかなか太っ腹だな。

「篠ノ之さんも準備いい？」

「はい。いつでも」

「それじゃ……開始っ！」

その瞬間箒は俺に向かって面をたたきこもうとした。
いやはや、俺の目に狂いはなかった。こいつはすごい。
踏込のタイミング、竹刀を振る速度、気迫ともに全くいいものだ。

まあ俺には届かないが。
俺はわずかに後ろに下がり回避した。
そしてその瞬間箒の小手めがけて竹刀をはね上げた。

篠ノ之箒ＳＩＤＥ

「開始っ！」

合図とともに私は今までで一番と思える踏込で和人に打ち込んだ。
だがこれで終わることはないだろう。おそらく私の竹刀を防ぐはずだ。
避けるというのは難しいだろうと思っていた。
だが、

「（なっ！一寸の見切りだと！）」

そう、和人はほんのわずか後ろに下がって紙一重で私の面をかわした。
さらにそのまま和人は下げていた竹刀をすさまじい速さではね上げてきた。
狙いはおそらく小手。

「（くっ、速すぎる！）」

私はそれを何とか下がって避けたが、
竹刀に当たって腕が跳ね上がってしまった。
そんな明らかな隙を和人が見逃すはずがなく、
はね上げた竹刀を水平に持ってきて私を超える速さの踏込で一気に…。

「胴！」

振りぬいた。

その瞬間、私は一瞬意識が飛んだ。

桐谷和人ＳＩＤＥ

「胴！」

俺は思いっきり箒のがら空きの胴に竹刀をたたきこんで…あ。

「やべっ」

とつぶやいた時にはもう遅い。
箒は吹っ飛んで道場の壁にぶつかってしまった。

「お、おい、大丈夫か？」

「……っぐ、げほっ、けほっ」

ほっ、そこまでひどくはないらしい。

「う…、か、和人？」

俺はするすると箒の防具を解いていく。
そんで全部解いたらそのまま箒を抱え上げた。

「なっ／／／何をする！」

「いや、一応保健室にな。結構本気で打ち込んだし、

万が一ってことがあり得るからな。
んじゃ、部長さん、すいませんが片づけお願いできますか？」
ちなみに俺の前言通り俺が振るった竹刀はばっきり折れている。
ついでに箒の胴は割れかけている。

「え、あ、うん。いいよ」

呆然としていた部長さん。そりゃそうだろうな。
人が飛ぶって初めて見る光景だろうし。
ほかの部員もぽかんとしてるし。

「そんじゃ、行くぞ箒」

「う、うむ／／／／（お姫様抱っこお姫様抱っこ…）」

むう、箒のやつ顔が赤いな。熱でも出たか？

『（……鈍感）』

『（ん？なんだって？）』

『（なんでもないよー（呆））』

？とりあえず俺は箒を保健室へ運び一応診てもらった。
結果、打撲のようになっていたそうな。
うん、やっぱり俺の本気は危険だわ。

「和人はすさまじく強いのだな」

場所は変わって寮の自室。
俺がＩＳの参考書を読んでいると箒が話しかけてきた。
「まあな。五歳くらいから常人じゃ死ぬような修行積まされたからな。
あんなことになっちまった。まったく、うちの爺どもは鬼過ぎるぜ」
いやはや、今思い返せばよく生きてたな俺。
「ふむ、例えばどのような鍛練を？」
聞いちゃうかい？よりによってそれを聞いちゃうかい？
「話してもいいけど、後悔するなよ？」
「？」
そして俺は自分がさせられていた鍛練の内容を話し始めた。
例えば体力強化のために両手両足に重さ一〇キロの重りをつけられてなおかつトラックのタイヤを引っ張って毎日二〇キロ走ったりとか。
動体視力を養うために滝の前に座らされて二週間ずっと滝を見続けてたりとか。
剣術修行で木刀でもって布を切らされたりとか。
まあこんなの軽いほうの一例にすぎないのだが。
ほら、話していくとどんどん箒の顔色が青くなってく。

「……もういい。というよりよく生きていたな？」
「俺もそう思う。こんだけ異常な鍛練積んでんだ。
ＩＳ戦闘なんかそれに比べればちょろいちょろい」
「（確かにそんな修行をしていれば
ちょっとやそっとじゃ脅威など感じないだろうな…）」
「ちなみに箒よ。お前シャワーどうする？」
「あ、ああ。使わせてもらう」
「ほいよー。ごゆっくり」

箒は着替えやらを持ってシャワー室へ向かった。
んで、俺は一人になったわけだが。
『（ねえ、今ならいい？）』
『（ん、いいぞ。悪いな、最近まともに相手してやれなくて）』
レスティアと雑談タイムだ！
『（別にいいよ。しょうがないし。
まだあたしが覚醒してるなんて知られるわけにはいかないでしょ？）』
『（ああ。さすがに騒ぎになりすぎるだろ。
第二形態移行してるんならまだ説明がつくけど第一形態で

コア人格覚醒っていうのは前代未聞すぎる。
第二形態移行してからなら別にいいんだけどな）』

『（まあ聡い人なら気づいてるかもしれないけどね。例えば織斑先生とか）』

『（あの人か……）』

確かにレスティアの言うとおり、あの人なら俺の戦い方でわかるかもしれない。
まあばれたらばれた時だし。

『（ま、ばれたらその時さ。お前が取り上げられるってことにはならないだろう。
ていうかそれが不可能だからあの時からずっと俺が装着してるんだし）』

そう、あの日、俺が初めてＩＳを装着し襲撃者を退けた後。
俺がつけているＩＳを開発していた企業の人が
一旦ＩＳを回収させてほしいというので回収させたのだが。
なぜかある程度俺から離れるとＩＳが粒子変換して
俺の手元に戻ってきてしまったのだ。

まあ真相は俺から離れたがらなかったレスティアがだだをこねただけなのだが。

『（さて、そろそろ箒も出るだろうし、雑談も終わりだ。決闘の時は頼むぜ、相棒）』

『（任せて！和人に完璧な勝利をあげるよ♪）』

ほんと、頼もしい相棒だよ。

俺の実力？知らないほうがいいぜ？（後書き）

作者：後書きでーす。今回は篠ノ之箒さんに登場願います。

篠ノ之：こ、ここはどこなんだ？私は寝てたはずなんだが…。

作者：まあまあ、細かいことは置いておけ。
とりあえずなんか言いたいこととかないか？

篠ノ之：う、うむ。まあそうだな。なぜ和人をあそこまで強くしたのだ？

作者：いやー、原作だと一夏くんって強さ微妙じゃん？
だから思い切ってめちゃくちゃ強くしてみようと思ったわけですよ。
それに基本作者は最強主人公設定が好きなので。

篠ノ之：そうか。

作者：あ、それと読者の皆さん。
お気に入り登録件数が４０超えてて作者はうれしい限りです。
少なくとも銀の福音までは更新が滞ることはないと思いますので
これからも読んでくれるとうれしいです。

篠ノ之：ちゃっかり読者の皆様に感謝の意を表すのだな。
まあ礼儀だとは思うが。

作者：当然だ。礼儀は正しくてなんぼだろう。
では次回予告お願いな。

篠ノ之：わかった。
ついに迎えた決闘当日
姿を現すは異端なＩＳ
それは蒼き雫を打ち砕くべく動く
そして自覚する想い
次回、『これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躙です』だ。
楽しみにしてくれ。

これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躙です（前書き）

どうも、葛縞です。
いよいよ戦闘です。と言っても戦闘描写に自信がありません（泣）
ですのでちょっとぐだぐだになってるかもしれませんが、
そこのところご了承ください。
なにかアドバイスがあれば一言なりで書いてくれるとうれしいです。

これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躙です

なんだかんだで俺は今アリーナのピットにいる。
そう、これからセシリア・オルコットと決闘なのだ。
ん？一週間の描写がない？別にいいだろ。
普通に過ごしてたまに箒と手合せしてただけだし。

ん？ＩＳの練習はって？
んなもんいるか。楽勝だ、楽勝。

「結局お前はＩＳの訓練はしなかったのだな…」

「だーかーらー、必要ないって。
訓練なんかしたらそれこそオルコットの惨敗が決まっちまうぞ。
俺はエンターテイメントを大事にするんだよ」

「……むしろ訓練を全くしていないやつに完敗するほうが
プライドにかかわると思うが」

失礼な。
俺がそんなことに行きつかないとでも？だからこそ、それがいいんだよ、箒」

「お前は本当に容赦がないな」

「あれ？なんで俺が考えたことわかるんだ？」

『（「途中から声に出ていたぞ（よ）。」）』

レスティアにもツッコまれてしまった。
うん、これから気を付けよう。

「桐谷、そろそろ時間だ。ＩＳを展開しろ」

「桐谷君、頑張ってくださいね」

織斑先生は相変わらずクールビューティー、山田先生は相変わらず癒し系だ。
うん、和む。

「了解。出るぞ、『暁と黄昏≪サンライズ・トワイライト≫』」

『（ＯＫ！）』

レスティアの声が俺の頭の中でのみ響き
それと同時に俺は紅と蒼の二色に彩られた全身装甲のＩＳを纏っていた。
俺の目の前に俺だけにしか見えない文字の羅列が映る。

シールドエネルギーチェック……ＯＫ
シンクロチェック……ＯＫ
フォームチェンジシステム《ラグナロク》チェックスタート
フォームゼウス……ＯＫ
フォームセラフィム……ＯＫ
フォームオーディン……ＯＫ
フォームチェンジシステムチェックオールクリア
スラスターチェック……ＯＫ
・

・　・　・
チェックオールクリア
サンライズ・トワイライト　スタンバイＯＫ

「よし。いける」

「こ、これが和人の…」

「ああ、これが俺の相棒だ」

箒が驚いている。
まあ全身装甲だしな。びっくりするよね。

「時間が推している。早く出ろ」

「そう急かさないでくださいよ～」

ピットが開く。そして俺は足をカタパルトに接続する。
そして出撃前に一言。

「桐谷和人、サンライズ・トワイライト、出撃する！」

俺は一気に飛んだ。

アリーナへと出た俺を迎えたのは
全身青のＩＳを纏ったセシリア・オルコットだった。
オルコットは俺の姿を見るなりわずかに驚いたようだが

すぐにまた見下したような顔をした。

「（全身装甲？しょせん防御タイプのＩＳですか。
わたくしの敵ではありませんわね）」

なーんて考えてんだろうなぁ。
そもそも全身装甲が防御タイプって考えは古いだろうに。

「ふん、遅かったですわね」

「いやぁ、ちょっとおもしろおかしくお話しててな」

「遅れるなんて紳士の行いではなくってよ。
……まあいいです。最後のチャンスをあげますわ」

ほ？チャンスとな？
……よし、いいだろう。遊んでやるつもりだったがやめだ。
全力全開超本気でなぶってやる。

「ちなみにだがオルコット、もう開始の合図はなってるよな？」

「？ええ、なってますが…、どうかなさいましたの？」

「いやいや、別に。だったらもう始めてもいいってことだよな」

『（スラスター、スタンバイＯＫ）』

「は？」

察しが悪いね。

「つまり、俺の先制攻撃ってやつだ！」

言葉が終わるか終らないかで俺は瞬時加速を発動。
オルコットの目前に瞬時に接近。
近接ブレード『デュランダル』を瞬時展開し切り付けた。

篠ノ之箒ＳＩＤＥ

「つまり、俺の先制攻撃ってやつだ！」

始まりはいきなりだった。
和人は二回目（……だったばずだ。うん）の
ＩＳ起動とは思えないことをやってのけたのだ。

《瞬時加速》、それは代表候補生クラスであればできるのはおかしくはない。
だがそれを全くの素人がやるのでは話が違う。

瞬時加速とはセンスがあるものでもある程度訓練をしなければあれほど鮮やかに、
滑らかには発動できないはずだ。

それを和人は！
私は戦慄を覚えていたが、瞬時加速の直後の光景にも目を奪われた。
腕を振りかぶった瞬間、その手には近接ブレードを展開、そのまま切り付けた。

その後はいったん離れてオルコットの狙撃をかわしていく。
一弾として被弾しない。
オルコットがビット兵器を使い始めたが、それすら当たらない。
ひらひらと木の葉が舞うかのごとく、全方位から襲い掛かるレーザーをかわしていく。
私は自分の口が開きっぱなしになっていることに気づいてはいたが、閉じることができなかった。
ちなみに私の近くには千冬さんと山田先生がいるが、
二人とも（特に千冬さんのあんな顔は初めて見たな…）
驚いて口が開いたままになっていた。

「……あの、織斑先生……」

「……なにかな、山田先生…」

「…彼って本当にＩＳ起動したの今回で二回目なんですか？」

「…ああ、そのはずだ。
企業からは何度も頼んでいたらしいがあいつはすべて断っていたらしいからな。
……篠ノ之、あいつは訓練などしてないと聞いたがほんとうか？」

あ、こっちに質問が来た。

「はい、和人は訓練なんて必要ない、むしろしないほうがいいハンデになるといって
一度もアリーナにすら足を運んでいません。

この一週間はずっと勉強してるか私と剣の稽古をしているかでしたから」

自分で言っててありえないと思う。
というより仮に一週間訓練に費やしたとしてもこれはあり得ない。
確かにセンスがよくて、訓練をしていればいい戦いはできるだろう。
だが今目の前で起こっていることはセンスの一言ではあり得ない領域だ。

「いったいどうなってる？
この動きはそんじょそこらの代表候補を超えるどころか国家代表にすら届くぞ？」

千冬さんがぶつぶつぶやいているが私には届かない。
私は驚きつつも和人の動きに魅了されてしまっている。

その動きはまさに演舞。
レーザーを風として和人を木の葉に見立てればそれで成り立ってしまうだろう。
レーザーを横に動いて避けるのではなく体を回転させて
レーザーと自分の位置を入れ替えてしまう。
……いったい和人の戦闘センスはどれほどなのだろうか…。

そして私は見てしまった。和人の目を。
その目は、親に与えられたおもちゃを前にした子供のような
純粋な楽しさに染まっていた。
その純粋な目を見た瞬間、私の中で揺らいでいたある想いが固まった。

そうか、これが……

『恋』というやつか。

これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躙です（後書き）

作者：……今回は戦闘中ってこともあって誰も出てこれませんねぇ。

どうしようか？

一夏：よう。

作者：！！！！！！！

なんでいんの？

一夏：さあ？俺もわかんねぇ。

でも誰もこれないなら別にいいんじゃないか？

作者：……まあいいか。んで、今回の感想としてはどうよ？

一夏：……（原作との）俺との扱いが違いすぎるぞ、これ。

作者：仕方があるまい。

二次創作とはそういうものだ。

そして俺は意図的に変えたからな。

一夏：……そうなのか…（すこし落ち込む）。にしても強いな、桐谷は。

作者：作者渾身の超人ですから。

では次回の紹介これで頼むわ。

一夏：（作者から紙を受け取って）おう。なになに

紅と蒼の機体が舞い踊る
ＢＧＭは英国貴族の喚く声
新たにする和人の意志
そして力の一端を見せる蒼紅の機体
次回、『決闘（という名の蹂躙）の終幕』
よろしくたのむぜ！

決闘（という名の蹂躙）の終幕（前書き）

決闘終わりです。
いや、これを決闘と呼んでいいのか微妙（笑）
一方的すぎる。
ちなみに今日は時間を空けてからもう1話更新したいと思います。
では引き続き桐谷くん無双です。

決闘（という名の蹂躙）の終幕

桐谷和人ＳＩＤＥ

？なんか妙に熱っぽい視線を感じる気がするが…。
それもピットのほうから。誰だ？

『（鈍感だね（笑））』

『（ん？なんだって？）』

『（なーんーでーもーなーいー）』

『（そうかよ…、ってこのやり取りいい加減デジャヴるわ！）』

そんな漫談をしながらも俺の体は動く。
ビットからの全方位射撃、そんでもって時々オルコット本人からの狙撃。
すべてを回避する。

……うん、爺どもとの鍛練に比べりゃまだまだいけるな
（爺どもの時は、鋼糸の足場に立たされて
上下左右全方位から矢が連続で射掛けられた。しかも矢じりありで。まじ死ねる）。

「くっ、なんで当たりませんの！」

「いやいや、あんたの狙撃がへぼすぎるんだよ（笑）」

「なんですってぇぇぇ！」
オルコットは俺のあざけりに対して大変取り乱し、ひたすら乱射を繰り返す。
ははは、計画通り（にやり）。
このままエネルギー切れしてくれんかね？
そしたら俺のフィーバータイムなんだが。
『（ドS……）』
違うなレスティア。これは戦略というものだ（キリッ！）。
戦闘において相手の弾切れを狙うのは卑怯でもなんでもない。
むしろ俺みたいな普通に撃っても当たらない奴には
普通に撃つのは無駄以外の何物でもない。
相手をわざと接近させてカウンターを狙うのがセオリーだ。
『（そんなことができるのは和人だけだよ……。普通は近づかれたら負けだよ……）』
おや？レスティアがなんか鬱入ってる？
おいおい、大丈夫かよ相棒。
『（うん、もうツッコまないことにする）』
そうしろ。精神的衛生のために。
……あり？さっきから射撃がやんでるぞ？

「どうしたんだよオルコット。まだ俺は墜ちてないぞ？
そ・れ・と・も♪エネルギー切れかにゃぁ？」
俺はにゃーんと猫のポーズをとってみる。
……うん、自分のポーズを想像したっけ吐き気した。
これからは自重しよう。
「……うかつでしたわ。わたくしを怒らせて無駄な射撃をさせるとは…」
おりょ？気づいた。まあ今更だけど♪
「今更かよ（笑）。普通はもっと前に気付くだろ。
つ・ま・り、おまえは簡単に相手にペースをつかまれる
うかつ極まりないやつだってことだ。
いやー、お前のおかげで希望持てたぜ。
お前程度のやつで代表候補ってことはほかのやつらも大体似たり寄ったりだろ？」
「……（頬をひきつらせている）。それがどうかしましたの？」
「いや、俺の目標が達成しやすくなるなってな」
「あなたの目標ですか？いったいなんだっていうんですの？」
ふっ、ついに言う時が来た！
「俺の目標はただ一つ。世界最強、世界最高の操縦者になることだ

！」

そう！男ならやっぱ目指すは最強とか最高とかだろ！
それに爺どももよく言ってたしな。

『和人よ、男児たる者最強や最高を目指せ。
その先に誰も見たこともない世界がある！それを見たければ鍛練じゃぁ！』

……後半で台無しだよ糞爺！

「／／／／／／／／／／／／」

あ？なんかオルコットの顔が赤く…？

『（フラグたったね）』

あん？死亡フラグか？

『（ある意味ではそうかもね（嘆息））』

え？マジっすか？

ならば俺はそのフラグごと死の運命をぶち壊す！

……なんか電波受信しました。申し訳ございません。

「ま、まあいいですわ。それよりも、そろそろフィナーレですわ！」

オルコットがライフルを構えようとするが、俺はすでに前方にはい

ない。
瞬時加速で下にいる。
さてと、ちょっくら使いますかね。

『（レスティア、フォームチェンジ。ゼウスよりオーディン）』

『（了解。システム起動。フォームゼウスよりフォームオーディン、セットアップ）』

レスティアの声と同時に俺の前に文字が現れる。

フォームチェンジシステム《ラグナロク》　起動
フォームゼウス→フォームオーディン
チェンジスタート

文字が消えると同時、俺は蒼い粒子に包まれる。
そして次の瞬間には俺のＩＳはその姿を変えていた。
比較的スマートだったボディーは先ほどよりごつくなり、
ウィングスラスターもまた肥大化してより翼に近い形になっていた。

何より違うのはその色。
先ほどとは違い、今の俺のＩＳは蒼一色だった。
これこそがサンライズ・トワイライトの特殊システム、『フォームチェンジシステム』、
システム名、《ラグナロク》だ。

チェンジが完了すると同時、
俺はオーディンの主武装である二丁一対バスターライフル『カラドボルグ』を展開、
二丁を一つにジョイントしバーストモードを発動

（イメージ的にはウィングガンダムゼロのツインバスターライフル）。

同時に照準をオルコットに合わせた。

ここでようやくオルコットは俺が下にいることに気付いたらしい。

たぶん目の前がロックオン警告でやばいことになったんだろう。

「な、なんでＩＳの姿が変わってるんですの？！」

わるいねぇ、それがこいつの仕様なんだわ。そんじゃはい終わり。

「カラドボルグ、照射！」

引き金を引く。

その瞬間、隣り合った二つの銃口から深蒼の螺旋が吹き出し、

オルコットを飲み込んだ。

そして俺の勝利を告げるアナウンスが響いた……。

決闘（という名の蹂躙）の終幕（後書き）

作者：はいお疲れ様。

桐谷：いや、全然疲れてないから。むしろ準備運動だったから。

作者：やっぱお前って規格外だな。

桐谷：そうしたのはあんただろう？俺のせいにするな。

作者：違いないねえ。
　でもそういうチートなところがおもしろいって評価を頂いてるんだよね。

桐谷：まあ俺も弱い自分なんて想像もつかないからいいけどな。

作者：ははは。んじゃま、少々短い後書きだったが次回予告頼むわ。

桐谷：あいあいっと。
　圧倒的強さの蒼紅の機体
　しかし現れるは地獄の審判員
　下される判決
　そして明かされる衝撃
　次回、『勝ったぜー。え？ちょ？待っｔ』だ。
　……俺が生きてることを祈っててくれ…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2312ba/

ＩＳ～紅と蒼を纏いし男～

2012年1月13日13時46分発行